山形県民教連通信

http://www.asahi-net.or.jp/~gy6e-kjm/

2023.6.24　No.76

Contents

巻頭言 「学徒出陣 」を危惧する…　(設楽会長) … 1
＜特集＞春の学習会2023開催（各講座より）国語読み　… 2
作文-3　社会、算数数学-4　理科-5　生活科総合-6
特別支援、学級づくり-7　メンタルヘルス、参加者の感想-8
俊太郎、ひで顕彰碑建立までの道のり　… 10
街角の平和論「息が出来ない！」　… 11
本の紹介　… 13
随想　「沖縄で暮らす７」　…14

山形県民間教育研究団体連絡協議会　通信
＜発行人＞ 山形県民教連事務局
〒990-0044 山形市木の実町12-37
県教組山形地区支部内
TEL/FAX 023-631-2112/2126
E-mail yamagata@yamagata-kenkyouso.gr.jp
＜編集人＞ 鬼島 悦雄 kijima@e.email.ne.jp

巻頭言

「学徒出陣」を危惧することは「妄想」ですか？

今、確かな事実･情報をもとに、推測し、判断し行動することが大切です

山形県民教連会長　設楽　隆雄

５月２８日ＴＢＳ系列『サンデーモーニング』は、広島で行われたＧ７サミットについての特集でした。Ｇ７による共同文書「広島ビジョン」について紹介し、この文書は「ロシアによる核兵器のいかなる使用も許されない」との記述にとどまり、すべての国を対象に「核の使用は許されない」とした半年前のＧ２０サミットでの宣言から後退したとの批判も上がっていることを伝えました。

そして、日本学術会議前議長、京都大学前総長の山極壽一氏が、昨年制定された国家安全保障戦略について言及し、日本が軍拡競争に参加することになると指摘した後に、「いずれは学生が動員される。すごく私は不安である。」と発言なさいました。

私は、「そうだ。きっと兵士が不足して、そうなるだろう。」と思い、太平洋戦争時の「学徒出陣」を思い起こしました。雨の明治神宮外苑競技場で行われ、2万5000人が秋雨でぬかるむ地面を、小銃を担いで進む学生たちの姿です。

ところが、翌日のネットニュースに、山極氏の発言について、「飛躍しすぎ」「現実を観ず妄想を語る」「は？妄想で何言っているのこの人」という猛突っ込みが集まっていたとありました。そして、この記事は、「中国やロシア、北朝鮮の脅威があるとはいえ、今すぐ戦争が始まる状態ではない日本。学徒動員はさすがに想像力のふくらまし過ぎだったようだ。」とまとめていました。

驚きました。山極氏の発言が「妄想」と捉えられているのです。辞書で調べると「妄想」の意味は「根拠もなくあれこれと想像すること」となっています。

山極氏は、過去の大戦で兵士不足のために行われた学徒出陣の事実、ロシアやウクライナで行われている動員の事実を根拠として推測したことであり、決して妄想などではありません！

※「推測」…現在までわかっている事柄から想像力などを駆使にしておしはかって考えること

私は、人々がもっともっと推測することが大切だと思います。

平和で安心して暮らせるよりよい未来を築くために、たくさんの知識、過去の出来事や現在の事実などをもとに推測し、自分がどう行動すればよ

いかを考えることが必要だと思うからです。
　そう考えると、学校教育は、様々な知識や思考の仕方を学び、それらを生かして推測し、行動していく力を学ぶ営みだともとらえられます。

〇軍事費５年で４３兆円は、どこから捻出するのか？　私たちの生活はどうなるの？
・これまで軍事費は１兆円でした。現在、給料は上がらず、物価高、電気代の高騰などで生活が厳しい状況です。
〇日本が敵基地攻撃能力（反撃能力）をもてば、周辺国はどうするか？
・相手の国も攻撃力を高めるでしょう。そうしたら日本はどうするでしょう。
〇中国の軍事費に対抗できるのか？
・中国の軍事費は、2022年度２７兆円。2030年度には８７兆円にあげようとしています。日本の国家予算は１００兆円規模です。対抗できるのか？
〇原発は稼働してなくても経年劣化します。６０年延長して大丈夫？
・東日本大震災では、配管が壊れ事故が起きました。
・ミサイルで狙われたらどうなるの？

〇少子化対策のお金の出どころが決まっていないのに今国会で決める、というのはおかしくないのか。
〇マイナカードでたくさんの問題が起きているのになぜすすめるのか。
・高齢者や介護施設に入っている人や障害を抱えている人達は大丈夫だろうか。

〇命の危険のある母国から逃れてきた人を強制送還したらどうなるのか。
〇世界が平和でみんなが幸せになるのは「軍拡」、「外交」のどっちなのだろうか。

　最近の政治情勢をみると、国民の声を無視した、民主主義の原則を踏み外したことがたくさん起こりすぎています。
　私たちのこの世界は、誰か（政治家）がつくってくれるから誰か（政治家）に任せるのではなく、自分たちでつくりあげていくというという主権者としての意識がこれからますます重要になってきます。
　衆議院解散の声も聞かれています。選挙は民主主義の根幹です。しっかり推測し、判断し、明るい未来につながる選挙にしていきましょう！
　そして、自分の思いを周りの人々に発信していきましょう。

山形県民教連　春の学習会2023
明日の授業のための教育実践講座
2023年３月２５日(土)　山形国際交流プラザ・ビッグウイング

　映画「教育と愛国」上映と基調講座として開催した「冬の学習会」に続き、教育実践講座としての「春の学習会」を開催し、多くのみなさんに参加していただきました。以下に各講座内容の報告と参加者の感想を掲載します。

国語読み

＜テーマ＞
言葉をもとに対話をして深く学ぶ国語の授業作り

　初めに、「芭蕉に学ぶ　俳句作りの授業」ということで、松尾芭蕉が山形県内で詠んだ俳句を学習して、その学習したことをもとに、自分たちで俳句を作ってみるという模擬授業を行いました。
　まず、芭蕉が山形県内で詠んだ俳句の一つである「あつみ山や　吹浦かけて　夕すずみ」を提示しました。季節は「夏」、季語は「夕すずみ」であることを確認した後、芭蕉は「どこで夕すずみをしたのか？」を考えました。「あつみ山」か「吹浦」か「とちゅう」か「（海の）船の上」か

で意見が分かれました。ここで重要になるのが、「かける」の意味です。この俳句の「かける」は「架ける」であり、「一方から他方へうつる」という意味をおさえたうえで、船の上で詠んだ俳句だったことを伝えると「なるほど」などの声が聞かれました。

その後、見たことや思ったことなどを実際に俳句で表現してもらいました。

次に「言葉を根拠にイメージ豊かに読む　詩の授業」と題して、詩の模擬授業を行いました。題材は、安西冬衛　作　題名「春」より「てふてふが　一匹　韃靼海峡を渡っていった」です。読み方を確認した後、ちょうちょうは、おだやかな韃靼海峡のどのあたりを飛んでいるのかを図に表してもらいました。これは、「渡っていった」の「いった」から陸を渡り見えなくなったことを確認しました。

最後に、「読む」とはどういうことかを参加者のみなさんと考えました。私はこれまで東北民教研等で学んできた、『「読む」ということは、言葉や文に即してえがかれていることを絵と感情におきかえること』ということを伝えました。

そして、模擬授業で行った俳句や詩の授業をもとに「言葉に即して読む」とはどういうことかを考えました。一つは、先の「俳句」に出てきた「架ける」のような国語辞典にも書いてある意味をはっきりさせることであり、もう一つは、先の「渡っていった」のように文の形（文法的な意味）の意味をはっきりさせるということです。「言葉に即して読む」といった場合、言葉の持つ二つの側面からの意味をつかむことがまず大切であり、このことが「言葉や文を絵と感情におきかえること」につながることを参加者で確認しました。

これらをふまえて、子どもたちへの「読み」の実践を積み重ねていきたいものです。

（佐賀井　伸）

国語作文

＜テーマ＞
今だからこそ
人と人とをつなぐ
作文教育

レポート発表者２名の他の１名の参加者は、子ども達に文章を書かせる技術を学びたいという理由で、参加したとのことでした。

レポート①「今こそ書き綴ることを大切に」

奥山　睦子

今の学校現場は、問題が山積みで、教師も子ども達も疲弊している今こそ、子ども達に見失いがちな自分を見つめさせるために、子ども一人ひとりと教師が心を繋ぐために、子ども同士の心を繋ぐために、社会に目を向けるために、子ども達に書き綴らせることが大事だという趣旨のレポートでした。

そして、①自分のことを書く、②家族とのことを書く、③友だちとのことを書く、④社会に目を向けて、の内容で、子どもの日記をもとに、説明しました。

また、書かせる方法や書かせてからの指導についても、説明しました。

最後に、「『読む力』は学力の下限を規定し、『書く力』は学力の上限を規定する」という有名な言葉で、締めくくりました。

レポート②「自己を見つめる作文指導」

近野　享子

生徒たちに書かせること・それを読むこと・読みあって学級づくりに生かすことは、とても楽しい仕事になりました。東北民教研や日作の全国大会、そして、山形県民教連の学習会に参加して、多くの先生方の実践に触れることができ、自分の

生活を見つめる作文が書ける生徒を育てるための、生活の土台作り・子ども理解・学習指導・ポイントを絞っての書かせ方・作品の取り上げ方等を学んできました。

そして、①学級担任として、②教科担任として、③書かせる場面、④交流の場面、⑤課題の内容で、話をしてくれました。学級通信を紹介してくださり、国語の授業で書かせた作文も、紹介してくださいました。

「作文にはドラマがある。」生徒理解にもつながり、書くこと・読みあうことで思いが深まり、共感し合えるということでした。学級づくりの柱にもなるとのことでした。

その後の話し合いで、参加した先生は、「子ども達に文章を書かせることがとても大事なことだということが初めてわかりました、今日学習したことをもとに日記や作文を書かせてみたいと思います」と言っていました。

（奥山　睦子）

社会科

＜テーマ＞
子どもが主体的に学んでいく社会科学習の進め方
実践紹介：鈴木昭彦先生

社会科分科会では、私たちを取り巻く社会課題に対して、『子どもが主体的に学んでゆく社会科学習の進め方』をテーマに、討論を行った。参加者は６名で近況報告から和やかに進めた。講座は、鈴木昭彦さん（＝鶴岡市立櫛引小学校)で、小３の「火事からくらしを守る」の主題での授業実践だった。

指導要領に見る全体目標としては、「社会課題を掴み、その解決に向けた選択や判断力・ 表現力を養う・・・・」とあるが、実際の現場では、「教材化への労力や時間がかかること、社会的(政治的)問題へのためらい・躊躇など」があり、その実践は極めて少ない実態にある。

そんな中での鈴木氏の実践は、子供たちの興味・関心を引き出す種々の相違と工夫が秀逸だった。①まず、子どもたちに「なぜ、どのような中身で、どんな手立て（＝方法)で」取り組むか、②詳細で、迫力のある教材（映像・写真・データ…）で、彼らの豊かな「発信力」を生み出し、「地域の消防団活動の、主体的な理解」を作り出した。子ど

もたちの父母も参加している消防団は、地域の生命と安全を守る部隊としての役割は、子どもたちの「感想文やレポート」に鮮やかに描かれ、参加者の共感を呼んだ。

一般に、地域課題の学習では、それぞれの地域・自治体には副読本があり、その活用法での工夫が大切だが、地域課題（＝地域矛盾）に取り組む、子どもたちを取り巻く父母・市民・農民・労働者たちの「生きるための努力」の検証は、大切である。「暮らしの安全と生命」を軸にした、今回の「防災活動」もその例の１つである。子どもたちの「生の声」に依拠した「豊かな学びの習得」は今回の実践の要諦かと思う。多くの仲間が、その視点に追従したいものである。

（田口　忠宣）

算数 数学

＜テーマ＞
ちょっとした工夫で、子どもをひきつける算数・数学の授業

この講座では、小学校の各学年の重要教材の中から、

小１「５をかんづめにすると世界が広がる」
（山川　貴子）

小４「分ける操作がわり算の筆算になる」
（早坂　久佳）

小６「タイルでわかる分数のかけ算の法則」
（早坂　久佳）

を中心に、参加者全員で子どもをひきつける算数・数学の指導法を学び合った。

小１「５をかんづめにすると世界が広がる」では、「絵カードを使った集合つくり」から「タイルと対応させて数字・数詞を導入する」までの流れを検討した。５以上になるとその大きさを直観

でとらえ切れなくなるが、「５のかんづめ」にすると、子どもたちが自分の力で繰り上がりや繰り下がりの計算の仕方まで考えていけるようになることを確かめた。

小４「分ける操作がわり算の筆算になる」では、具体物を分ける操作がそのままわり算の筆算になっていく実際の場面を見合った。「チョコレート７箱４個を３人に同じ数ずつ分ける」ならば、まず２箱ずつ６箱が３人に分けられ、残りの１箱が開けられて４個と合わせてまた３人に分けられる。その操作の順序通りに筆算の数字が表れてくる。

```
        2      4こ
３人）７はこ４こ
        6はこ
        ―――――――
        1はこ４こ
        1      2こ
        ―――――――
               2こ
```

小６「タイルでわかる分数のかけ算の法則」では、タイル図をかいて量分数で考えることの大切さが指摘された。真分数をかけると答えがもとの数より小さくなる。つまり量として少なくなっていることに、タイル図をかきながら子どもが自分で気づいていける。「分数のかけ算は分母どうし分子どうしかける」というやり方だけは覚えるが、計算の答えが何を意味しているのかわからない子どもが多い教室の現状は問題である。

“アクティブラーニング”“スタンダード”“個別最適化”“ＧＩＧＡスクール構想”など、新しいものが次々と現場に押し寄せる。それらに必要以上に振り回されず、教材を見て何を教えていくのかをしっかりとらえたい。そして、体験や操作によって考えるおもしろさを子どもたちに味わわせたい。　　（山川　貴子）

＜テーマ＞
教師も子どもも楽しめる本質的な理科学習

講師：丸山　哲也　先生
(茨城、前科教協委員長)

講師の丸山先生の講座では、①「理科の授業は、実験が要」②「１時間１実験(１課題)の授業」③「自分で、試して、確かめて、学ぶ」ということを中心にして、参加者と実験をしながら、模擬授業的な要素も入れていただいた。

理科の授業がうまくいかない原因はいろいろあるが、その中でも丸山先生はズバリ「教科書の指導計画が原因」と指摘。問題を見つける段階でも、予想を立てる段階でも、結果を考察する段階でも、それぞれが子どもたちにとっては難しい場合が多い。えてして「教科書先読みは派」「先行学習派」の勝利となり、子どもたちは「教科書読んどけばよかった。」となってしまう。

そこで、「１時間１課題の授業づくり」の例として、「空気にも重さがある」という模擬授業的な実験の紹介。上皿天秤を使い、空気入れのバルブを取り付けた自作の気体のボンベの重さを量り、空気をぎゅうぎゅう詰めにしたボンベの重さを量って比較。

さらに、「植物の成長と日光の関わり(６年)」の単元で、教科書では５時間扱いなのに実験は１つという指導計画になっているものを「１時間１実験」の指導計画に改変した例を紹介。①でんぷんを含む食物調べ　②植物はでんぷんをつくる（ジャガイモの若い葉）　③同（カタバミ、クローバーなど）　④日に当てた葉と当てない葉の比較実験　⑤光合成でできたでんぷんは何に使われる（テスト）の５時間で計画。実際に様々な葉を使いヨウ素液で調べる実験は、小さなポリ袋を使ってかんたんに結果が出る方法を紹介。

また、電気の学習では、「理論学習から、実際に使える技術学習」を重視、４年生で扱う「直列・並列」の学習での例として、実際の場面で「乾電池の直列つなぎは多用されているが、豆電球の直列つなぎは使われていない」「乾電池の並列つなぎはほとんど使われていないが、豆電球の並列つなぎは日常的なもの」であるため、それぞれの回路図を考え、実際に配線して結果を出した実践の紹介であった。

丸山先生はたくさんの実験を準備してくださり、参加者が実際に手にとって体感できる講座となっ

た。（実験の用意はたくさん準備していただいたが、時間が足りなかった。）もっと先生の話を聴いて、もっと多くの単元例を知って、「１時間１実験」の実践を広げていきたいと感じた。

最後に、参加者の斎野さんから「月の満ち欠け（６年）」の学習で、現在の教科書の図では子どもたちの理解が難しいとのレポート提案があった。

（鬼島　悦雄）

生活科総合

＜テーマ＞
子どもが創る
生活科・総合学習
講師：小野寺 勝徳 先生
（宮城 鹿島台小学校）

小野寺さんの実践には本物に触れて考えさせる迫力がある。だから、子どもは当然引き込まれていくし、ワクワクしながら自らの探究心に火をつけていく。体験がきっかけとなり、そこから学びが広がっていく「生活科・総合学習」。

そこには、いつも知的興奮に魅了され、追究の手をゆるめない小野寺学級の子どもたちがいた。

本講座のテーマは子どもが創る生活科・総合学習。小野寺さんは「総合学習から総合教育へ　～食農教育から学んだこと～」と題し、学ぶ子どもたちの画像映像を交え、熱く語って下さった。

地域にゆかりのある特産品や農作物の起源や工程を調べ、その製造や栽培の体験を交えながら学習を進めて行くという構成はよくある。学校によっては「ハイ、これがこの学年の定番テーマです」という学校も多い。追究対象として取り組み始めた学年は驚きや感動があっただろう。前の学年が解明できなかったことに迫ることができた子どもたちにも知的な興奮に包まれたはずだ。生活科や総合学習は前例を「なぞる」だけの追体験で終わらせてはいけない。

小野寺さんは、追究対象と子どもたちとの出会わせ方を日常のありふれたシーンから呼び込む。例えば、今朝の各自の朝食から何が見えるか、同じ会社が作るギターの音色から販売価の異なる理由、飲んでいる牛乳の味の説明等。体験を通して意味を考えさせるのだ。そこから自分たちと専業農家の方の植えた稲の収量の違いの原因追究へつながっていく。

小野寺さんはササニシキ、ひとめぼれの故郷で、米作りを中心に広く「食と農」にかかわるテーマをアップデートしながら生活科や総合学習の指導に取り組んで来られた。食農の学習は教科領域の境を越え、自分たちのあらゆる暮らしに関わっていることを子ども自らが発見していく。総合学習から総合教育へのサブタイトルに込められた意味に参加した誰もが納得の90分であった。貴重な学びの機会をいただいたことにあらためて感謝したい。

（東海林　仁）

＜参加者の感想より＞

○　全ての教科につながる、見方・考え方までつながっている講座で、とても面白かった。自分のこれまでの実践、（カリキュラム）マネジメントの甘さを感じた。全ての教科を巻き込んだ総合学習をめざし、学びたい・やりたいが溢れるような実践づくりに活かしていきたい。

○　「判断の基準」という話があった。「好き嫌いで判断することは危ういこともある」という話から自分のこれまでの実践を振り返ることができた。（テーマや素材を）何をもって良いと考えるのか、何をもって選ぶのか、など根拠をしっかり考えないといけないんだなと思った。…自分で考えられる子どもを育てられるようにしたい。

特別支援

困った子は、「困っている」子だとわかっていても･･･

発達障がいについて理解している教職員が増えていますが、実際学級でどう対応したらいいか悩んでいる方がたくさんいます。学級で気になる行動をする子どもたちの対応は個別に違う場合が多いので、今回は参加した方から悩みを聞き、その行動をどう捉えるかについてアドバイスしながら、参加者同士で考えていきました。

参加者の悩みを聞いているうちに、子どもたち、そして保護者の行動や考え方がコロナ前と比べて変わってきているのでは、と思いました。（個人的な感触なので確実ではありませんが。これは、今後いろんな視点から検証していく必要があると思います。）それは、子どもたちのかかわり方が未熟であるということです。自分視点の捉え方だけで相手を非難してしまいトラブルになってしまうケースが増えており、その解決に時間がかかってしまい、担任の先生は疲弊してしまっているのです。

また、集団での学習が難しい子どもたちも増えているようです。これは、単に発達障がいのせいでないことを、私たち子どもと関わる者は知っておかなくてはなりません。子どもの生活習慣、特に睡眠時間やネットとのつきあい方、大人たちのかかわり方も子どもの行動に影響を及ぼしています。「この子は発達障がいがあるから・・・」と言われてしまうことがありますが、それぞれ抱えている背景が違うことを知っておく必要があります。

気になる行動をしてしまう子に対し個別に対応してしまいがちですが、学校生活のほとんどは「集団で」生活しています。したがって、「個人より集団を意識した対応」が大事になってきます。つまり、集団を育てていくことが大事なのです。気になる行動にどうしても目がいってしまうのですが、その子のよい部分を伸ばす方にウエイトを置いていくと、少々時間はかかりますが自ずとよい方向に向かっていきます。ただ、一人でがんばる必要はありません。今回の講座のように、悩みを出し合い、「今やっていることで間違いない」ということを確認し合う機会が必要だと実感しました。「集まれば元気、話せば勇気。」またこのような時間を作れたらと思っています。参加してくださったみなさん、ありがとうございました。

（後藤　美子）

学級づくり

＜テーマ＞子どもも教師もきらめく学級づくりをめざして

講師：植松 保信 先生
　　設楽 隆雄 先生

生活指導・学級づくり分科会は、他の分科会の参加者にも参加できるようにＡＢの２講座開催した。どちらの講座とも講師を含め、１１名の参加があった。ベテラン教師の参加もあったが、村山地区を中心に新採６年以内の青年教師の参加も多かった。また、４月から教員になる大学生の参加もあった。

自己紹介後、参加者の大沼さんから学級びらきでも使えるロープを使った手品の紹介があり、参加者みんなで練習した。（手品用のロープは参加者へプレゼント）

講座Ａは、設楽隆雄さんが講師となり、学級の実態や学級行事の取り組み方、発達に課題のある子どもとの学級づくりや集団遊びなどについて話していただいた。

講座Ｂは、植松保信さんが講師となり、学級び

らきのやり方や「子どもとともに学級をつくる」のレポートをもとに話していただいた。

両講師とも、学級づくりのねらいや班・リーダー・討議づくりの大切さなどを実践を通して説明していただいた。１講座９０分という時間だったが、内容が豊富で質問時間が取れないほどだった。参加された先生方は、日頃の授業や学級づくりについて真剣に悩んでおり、指導を受けたがこれでいいのか、何とか今の状況を変えたいという思いを強く感じた。また、今回の参加者のうち、２月に行った県生研冬の学習会に参加された方が１４名もおり、これを機会にサークルや学習会に誘って、悩みから実践につなげていきたい。

（大場　理之）

教員のメンタルヘルス

＜テーマ＞
きつく叱って
後悔して
いませんか？
講師：須藤 好子 先生

怒りをコントロールして人生をもっと楽しく！
「思いが伝わる叱り方で円滑な人間関係」

講師の須藤好子先生が和やかな語りで打ち解けた雰囲気を作ってくださる中で、参加者１０名が２つのグループに分かれて「叱ること、叱らないことのデメリット、メリット」を話し合うことから講座が始まった。考えを交流し合う中でメリットになる叱り方を学ぶ大切さを確認し、アンガーマネージメント協会のテキストに沿って講義が行われた。

先日の長野での痛ましい事件を見るにつけ、怒りのコントロールを知ることは、教員はもちろん、一般の方も、子どもたちも知っておくことが必要だと思われた。アンガーマネージメントはアメリカで１９７０年代に軽犯罪者のプログラムとして開発されたものから始まったという。

アンガーマネージメントは、後悔しないように怒る必要のあることは上手に怒る事である。そのために講座では、怒りは人間にとって身を守るための自然な感情の一つであることを押さえた上で、私たちの怒りの正体は「～べき」があり、怒りが生まれるメカニズムがあり、上手な叱り方を普段からトレーニングしていける事を学んだ。

具体的には、

・感情的になって叱ってしまった時に、自分の叱り方はどうであったかと振り返るときのポイント（例えば責める言葉や強い言葉は良くない等）があり、自分を見直していくこと。
・上手に叱れる人を真似てみることや、叱り方の表情や声のトーン、場所、言葉など変えやすいものから一つ変えてみて、上手くいったことは変えずに、スモールステップで試してみる。

今回の講座は入り口で、もっとお聞きしたいと思うところで終了だった。関連した講座が色々あり、奥の深い学びだと思った。　（大宮多恵子）

春の学習会2023
明日の授業のための教育実践講座
参加者の感想から

大変参考になりました。普段かかえているモヤモヤが少しはすっきりして、次の授業から生かしていく事ができそうです。是非またいろいろな研修会を開催していただけたら、とてもありがたかったので検討してみて下さい。　（酒田　中学校）

本日は二つの講座に参加させていただきました。国語作文の講座では作文を書かせるという活動を通して子どもとどんなつながりを持つかということや、書くことを通してどんな力をつけたり、どんな内面を引き出すかということを、改めて学ぶことができて良かったです。

学級づくりの講座では、植松先生の実践から、明日からでも学級の中で活用していけるような遊びやシステム作りについて、たくさん教えていただくことができ良かったです。四月からの新しい学級との出会いの中で、たくさん活用していきたいと思いました。（村山　小学校）

社会科の鈴木先生の実践レポートを聞き、圧倒されました。教室にいたわけではありませんが、その場にいたような感覚をもちました。地域の課題（problem）を見つけ、どう解決するか、子どもたちが真剣に話し合うことでたくさん学んでいる姿が想像できました。しばらく社会の授業をしていないので、やってみたくなりました。（小学校）

算数の授業をしていて、「簡単」「計算楽しい」などと言う一方で、思考を深める問題（応用）になると、とたんにやる気をなくしてしまうことがあり、大変悩んだ一年でした。

まずは、数を量として捉えること、ナンバーリングで覚える訳ではないということに気付かされました。自分自身が量として数を捉え、指導していけるよう研究していきたいと思います。（不明）

今回、「学級集団づくり」と「生活科・総合学習」の講座を受け、学ばさせて頂きました。どちらの講座でも、目の前の子どもたちをどのように育てたいのか、子どもたちと何をしたいのか、自分自身の軸をしっかり持つことが大切だということを学びました。

物事の本質を見ていく力を身につけていくために、教職だけにこだわらず様々なことに「なぜ」「どうして」と疑問を持ちながら関わっていくことが大切なのだと思いました。明日からでもこの見方をのばしていけるよう物事をじっくりと見ていきたいです。（山形　小学校）

分かりやすい指導で授業のイメージがわいてきました。教科書の流れに沿うだけでない指導法で、子どもたちがたくさんすくわれる場面があると感じた。（村山　小学校）

本日の実践講座は大変勉強になりました。「学級集団づくり」では、班活動の重要性を改めて感じました。子どもたちに役割を与えることは自己存在感にもつながるのだと思いました。

また、「国語・読み」では、子どもたちへの発問の仕方を学びました。明確な内容だと、子どもたちも考えやすいことを知り、４月からの授業に活かしていきます。

教員としての自分の核を大事にして、これから子どもたちと接していきたいと思いました。（村山　中学校）

最近、愛着形成不全と思える子が増えていると思います。今日、薬では治せない、学校ではまちがった人間形成の仕方を誤学習してしまったことが原因で、学校ではせめて普通のかかわり方（怒るのでなく、教えて、ほめて、叱ったらフォロー、など）をしていくこと。

担任一人で対応はムリ、まわりの先生、医療機関との連携が必要、などがよくわかりました。

高いところに登る、廊下を走る、などの行動は、声をかけてもらえるということでうれしくなる、という報酬を与えたことになる等の話がとてもわかりやすかった。皆さんの話の中にも、ヒントがたくさんありました。後藤先生のお話、とてもわかりやすかったです。（鶴岡　小学校）

通常学級にいる発達支援が必要な子どもたちと、どう関わっていけばよいのか学びたくて参加しました。

たくさんの具体的なアドバイスが聞けて、本当にあっという間の時間でした。「自分は犬とおつきあいしている」「のらねことおつきあいしている」と考えると気持ちがラクになるというアドバイスもいただき、心が軽くなる方法も知ることができました。

今日学んだことを4月からの学級経営にたくさん生かしていきたいと思いました。参加して本当によかったです。

また、Ｂの「学級づくり」も、とても勉強になりました。マジックのヒモもいただけて、ありがたかったです。今日教えていただいた「学級びらき」のやり方を、ぜひやってみたいと思いました。こちらも、参加して本当によかったです。（山形　小学校）

新年度、新学期の特別支援学級の経営に参考になりました。（鶴岡　小学校）

『村山俊太郎･ひで顕彰碑』　･･･建立までの道のり

実行委員会事務局長　早坂　久佳

５年前に募金を集めて村山俊太郎の碑を立てるというどえらいミッションがまわってきたなと思ったのが始まりでした。その以前のことは須貝和輔さんからお聞きしましたが、四十年も前、県教研東根集会のイベントとして山形教労結成五十年に学ぶ会を開いた際、招待された先輩たちから「村山こそ組合の産みの親、教育会館の脇に碑でも建てなねべ」との話が出ていたとのことです。４０年来、逸見さん輝男さんから夛田さんへ、夛田さんから私達へと託されました。同じことを考えていた国賠同盟の瀬野さんと相談しながら、準備委員会から実行委員会を立ち上げようとすすめました。

私は民教連所属ですから、俊太郎が戦前戦後と２度も結成させた教職員組合に呼びかけましたが、県教組に行って実行委員会結成趣旨をお話ししたけれども次の日お断りされました。そんなこともあり、俊太郎のことを知らない人たちに実行委員や募金をお願いできないだろうと、学ぶ会として発足したわけです。その後１年１回の学習会を開いてきました。その中で、秋田から始まった北方性教育運動を山形に広げ、国分一太郎にも勧めた第一人者であること。そして、一人の教育者としての研究だけでなく、父母や労働者とつながり貧困を克服する実践者として、戦前から教員組合の結成を成し遂げた人であることがわかりました。しかし、非合法で子ども達の目の前で検挙されてしまいます。

３年目はコロナ禍で集会はできませんでしたが、悩んでいた建立場所について、墓を山から平地へと移転するということでそこに合わせて建てようと考えました。そして自然石でできた墓で俊太郎とひでさん２人だけの墓標だったので、２人の顕彰碑として呼びかけようと話が進みました。村山ひでは、「明けない夜はない」という本で俊太郎以上に有名ですが、生活綴り方教育を戦後も続け俊太郎死後１年後にレットパージで教職を追われたものの、その後女性の地位向上のため女性議員として先駆的な役割を果たしました。

山教組の方は輝男さんつながりで当初から実行委員になっていただきましたが、４年後の募金開始前の組織会議で個人の墓の移転に金を出すのかという話になったということで、改めて金が関わると話がもつれるということがわかりました。でもそこは、こぎ出した船ですから誤解を解き、士郎さんのすすめで呼びかけ人を４０人を集め、募金活動に入りました。

しかし、募金活動の難しさはもう一つありました。新婦人の生みの親であるひでさん、俊太郎実行委員会で一度断られた新婦人にチラシは配るという約束をしていましたから、ひでさんも入ったので趣意書を送ったら、募金活動だから配れないというのです。青天の霹靂でした。県教組と新婦人、二人が職を追われてまでも未来のために結成させた組織が、忙しいからと言って拒否したとすれば、組織の代表者として歴史を顧みない不勉強さであり、お二人にはあまりにも惨い対応です。

募金活動が始まる前に、ロシアによるウクライナ侵攻がありました。中国、北朝鮮、ミャンマーとコロナ禍の中、世界の指導者による横暴が広がり、日本もまた集団的自衛権と敵基地攻撃能力の保有で未曾有の軍備増強へと向かっています。俊太郎とひでが生きた暗黒の時代に戻っている危機感が、今回の募金の原動力になったのだと思っています。２度と過ちは繰り返さないとした日本国憲法をいじくり回している岸田首相を平和主義を棄てたと断じたのは、こともあろうにアメリカのタイム紙です。日本のジャーナリスト達は何をやっているのか、タイムショックだったはずです。

最後になりますが、顕彰碑は80万円の募金目標を立て取り組みました。現在の募金総額は、目標額を遙かに超えた1,882,008円です。残額70万円については、毎年開いてきたこれからの会の基金にさせてもらいたいと考えています。（実行委員会で検討）

地域を見れば世界がわかる時代です。生活を見つめ、真実を見抜く教育のあり方など。また、村山士郎さんの平和教育の本があります。今学校はこの営みを忘れています。これらに視点を当て俊太郎・ひでの灯火を消すことなく、光り輝くまで皆さんと力を合わせていきたいと思います。

第70回東北民教研「浅虫集会」のご案内

■浅虫集会テーマ
「学校の中に人間の息吹きを！
子どもたちに希望を！教育に自由を！」

■日時　2023年８月８日(火)・９日(水)・10日(木)

■会場　青森市浅虫温泉　浅虫さくら観光ホテル、他

■記念講演

演題　『日記を読み合う中で子ども達は成長する
－私が教師を続けられた理由
・岩手大学教育学部講義録から－』
講師　工藤 ふみ（日本作文の会・岩手大非常勤講師）

■分科会　各教科・領域毎に17分科会、
テーマ毎に６特別分科会

※詳細は同封の集会要項を参照下さい。

すべての子どもに 生活に根ざした表現と 生きる力を

第71回全国作文教育研究大会 2023年　宮城大会

会場：宮城教育大学

7月29日(土)　全体会・記念講演
7月30日(日)　分科会（１６）
7月31日(月)　講座（７）閉会行事
※３日間共に対面とオンラインの併用

隣県宮城仙台に、全国の仲間たちが集います。子どもたちの日記や作文をどう読み合い、何をどう育てるか、一緒に学びましょう。

〈申込み、詳細は〉日本作文の会HP
http：//nissaku.c.ooco.jp/
（株）富士国際旅行社を通じて

街角の平和論

『息が出来ない！』

（＝アメリカの宿痾（しゅくあ）を見たが・・・）

― 活発化するＢＬＭ運動を考える ―

田口　忠宣（歴教協）

①テニスの大阪なおみ選手が公式試合時に「黒のマスク」で「反差別」を示威し、スポーツ界に大きな反響を呼んだ。彼女は「日本人ではない‥」とのＳＮＳも飛び交い、「レイシズム」かとの話題を集めた。日本では一般的に、人種差別が隠されており、国内で頻発しても、何故か、政府の具体的な対処（＝調査･統計など）は見られない。

「反レイシズム」の規範もない。【日本では人種は無いが、人種差別は介在する・・】というのだ。さて、表題に掲げた叫びは、2020年5月25日、アメリカ・ミネアポリスで「20ドルの偽造紙幣で警官に拘束された黒人のＪ・フロイド氏が、強度の頸部圧迫を受け、「息が出来ない＝ Ｉ can't breathe ！」と呻き死亡した。「8分46秒の衝撃」であった。其の動画が拡散し、夜には抗議・乱闘が起き、27日には全米各地に拡大し、アトランタ・セントルイス・ワシントンＤＣ等々で大規模な騒動が起き、デモ隊と警察との衝突が激化したもの。ここから、いわゆるＢＬＭ運動が加重化し、大きく展開したのだ。

②先日、アメリカ映画「デトロイト」（＝2017年作品）を見た。キャスリン・ピグロー監督で、1967年の[アルジェ・モーテル事件]を描いたもので、若い黒人客が不当に警官による暴行・殺害まで受けた内容で、後の裁判でも加害の警察官が無罪に・・・の内容だ。アメリカの「今日的現実」が浮き彫りにされたもの。アメリカでの人種差別に伴う殺傷事件は、黒人を筆頭に今も尚、ヒスパニック・アジア人・ラテン民族・ネイティブアメリカンに至るまで広範に及び、不当な結末が絶えない。かつて、元トランプ大統領は、「ならず者」発言で、根深い人種差別の公然の弾圧が行使され、警察権力の強化が遂行された。分断するアメリカの一断面でもある。

③藤永氏（日女大）によれば、アメリカの人種差別の歴史は建国以前からもあり、1948年のトルーマンレポート（⇒人種偏見のあるのは支配的。黒人は銃で襲撃され続けている・・）、1968年のジョンソンレポートでも「騒擾頻発の原因に、白人のレイシズム」との指摘がある。60年代後半の公民

権運動により、各種の法整備が実施されても、人種的な不平等は改善しなかった。2000年に入ってからの多くの黒人の不当な殺害は頻発し、警察側の裁判無罪のたびに、Ａ・ガルザ氏は「ＢＬＭ」と称し、其の人種差別は「レイシズム」として告発した。総じて言えば、アメリカは圧倒的な人種主義的な刑罰国家であり、人口13%の黒人が高い懲役刑（＝37%)を受けており、受刑率の比は、黒人が5.6対1(＝白人）・・である。今やアメリカは圧倒的に近代的な都市社会ではあるが、「インナーシティ」により白人人口の都市空洞化で、郊外の白人高級住宅にはカウンセラーの配置とソーシャルワーカーが健在だが、インナーシティでは、高圧的・戦闘的なポリス配置が敷かれ、その処遇の差は歴然としており、アメリカ政治の保守化と刑罰国家のレジームは今も揺るがないのである。アメリカ中心のＢＬＭ運動は、レイシズム（＝暴力的な差別）として肥大し、世界各地に拡散し、当地でのヘイトクライムの頻発を招いている。2019年での銃乱射事件では「ヒスパニック系移民こそ、テキサスの侵略者だ‥」と叫んで止まらない。

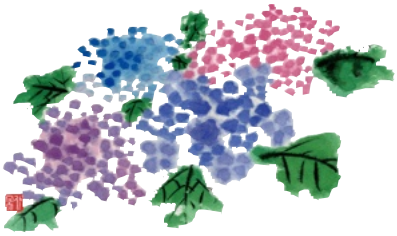
このＢＬＭ運動は既に７年を経過していると言われるが、酒井直樹氏は「その背景として～旧トランプ政権の影響と新自由主義の限界の露呈と共和党を挙げている。運動の中心である若者は、今や黒人・白人・アジア人とに広がっており、例えば日本の種々の差別や戦争貴任とも深く結びついているというのだ。（＝2020年、「現代思想」10月臨増号「人間解放の連続体としてのＢＬＭ」より集約）

④では日本における人種差別はどうなのか？　日本にはないと豪語する背景として日本社会での“公論化する歴史修正主義、蔓延する反知性主義や積極的な差別政策・反人種主義差別をとらない政府”などがあるという。（＝呉永鎬、2021年２月、NO.920号「歴史地理教育」より）その所在を在日朝鮮人に対するヘイトスピーチから考察している。一般にヘイトスピーチは、「人種・民族・性・出身地特定の属性理由での、言葉による差別であり、物理的な暴力を誘引する・・」と言う。2012年～2015年までの４年間で1152件、2016年にその「解消法」が出たが、実効性は乏しいもの。表現の自由もあり、法規制の難しさがあるようだ。しかし、1923年関東大震災での朝鮮人虐殺や、2009年の京都朝鮮学校前などでの多くの場面でのヘイトスピーチの酷さは、歴史的・社会的に作られてきており、国としての認可や支援給付金の扱いなどは無視・除外の連鎖が続いている。そこでは、学習権・教育権・生存権までもが否定され続けてきたのである。アジア民族の同胞としての「多文化共生社会の築き」の方向には程遠い。その意味で、飽くなきマイノリティへの憎悪は、日本での人種差別(＝レイシズム)の渦中にあると言えよう。

⑤今日のレイシズム現象について、梁英聖は日本での多くの経緯を紹介している。映画の「パッチギ」（2005年作品）から始まり、差別煽動からの「右翼ナショナリズム」による暴力事件は、例えば国士舘の極右教育（吉田松陰以来の尊王壌夷・皇国史観教育の年代例として「在日」の「不逞鮮人」像を創出している。官民ほぼ一体としての偏見弾圧は累積している。その中で、彼等マイノリティの声を丁寧に聴くことが重要かと思う。呉氏は、Ｔ・モーリス・スズキの提起した言説を提示した。⇒現社会が過去の憎悪や暴力の上に成立していたことは贖えないが、私たちの加担の有無にかかわらず、こうした過去や他者への連累（＝事後共犯）への自覚が必要であるというのだ。過去からの暴力や憎悪を払拭すべき持続的な努力が大切。“すなわち、「責任」は私たちがつくった。しかし、「連累」は、私たちを作った・・・・”と。噛みしめて他との柔らかな共生を図りたい。

⑥辺見は、日本の歴史にも触れて、「過去の“不適切な侵略戦争”で無辜の民を数多く殺傷してきた。そして自らも核爆弾を２個も落とされて、虐待を受けてもなおかつ“貴任の所在”を明らかにしようとしない・・・」。コロナ渦で「新しい生活様式」の呼号のなかで、「社会ダーウイニズム」（＝適者生存）が浸透している。日本のレイシズムはアメリカのそれと変わらない位の「横行」があり、差別・偏見が再生産されているとも言う。私たちはこの警鐘に注視すべきである。

（０５.０３.０１）



編集者注）「ＢＬＭ」＝Black Lives Matter（ブラック・ライブズ・マター）アフリカ系アメリカ人のコミュニティに端を発した、黒人に対する暴力や構造的な人種差別の撤廃を訴える、国際的な積極行動主義の運動の総称。

本の紹介

全養サ50年のあゆみ

全養サ50年のあゆみ編集委員会
1冊　千円＋送料

１９７１年８月16日東京目黒動力車会館において第一回全国養護教諭サークル協議会（全養サ）研究集会が開催されました。以後、全国各地に結成されたサークルの全国組織を作り、毎年夏に研究集会を開いてきました。「地域に根ざして健康教育の創造をめざして」をテーマに子どもたちのいのち、からだ、心を見つめ、守り、育んでいくために日々の実践を振り返り、学び合い、繋がり合いながら、子どもたちが笑顔になる教育実践を創造してきました。

全養サは、10年ごとに記念誌を編集・発刊してきました。その時代の情勢、子どもたちの様子、健康課題、養護教諭の実践、全養サでの学びの記録として残してきました。

そして昨年「50年のあゆみ」を発刊することができました。テーマは「50年の学びを継承し　新たなあゆみを～養護教諭の仕事に確信をもって～」ですが、養護教諭以外の方にも読んでいただきたい内容です。

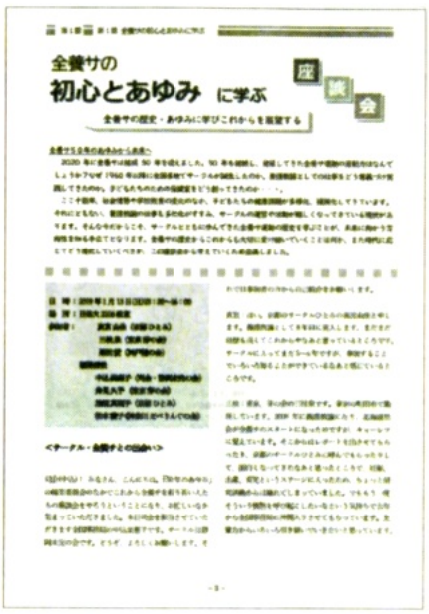
50年の子どものからだと心の変化を10年ごとに分析し、グラフや図で分かりやすく掲載しています。

また、本来であれば２０２１年に発刊する予定だったこのあゆみは、新型コロナウイルス感染症流行のために１年遅れての発刊となりました。しかし、コロナ禍での学校の様子や子どもたちの様子をサークル員に聞き取り、「新型コロナウイルスの現状と課題」ということでもまとめてあります。

◆申し込み方法

メール　hisashibu@icloud.com に氏名・所属・送付先の〒住所・注文冊数（10冊以上送料無料）を入力してください。

（渡辺みどり）



（日本民間教育研究団体連絡会「民教連ニュース」2023年６月号 №274より転載）

～随想～　沖縄で暮らす⑦

観光に沸く沖縄と、無視され続ける沖縄

早坂　久佳（山形）

２月に入り、コロナ感染者が激減し沖縄も旅行者で溢れはじめ、あちらこちらで渋滞に巻き込まれるようになった。２年前の緊急事態による当分の間休業の張り紙は見かけないものの、廃業に追い込まれた廃墟のような建物にコロナの爪痕が残っているようだ。

沖縄の海風は、老朽化を早めるのか白く塗られたコンクリートを黒づんだ色に変えてしまう。とは言えどこよりも早い観光産業の復活により、沖縄は元気を取り戻し、玉城知事以外連敗続きのオール沖縄も盛り返してくるだろう。というのも経済が弱くなるとどうしても甘い言葉に流されてしまうものの、背に腹はかえられない事態が終われば また正直に物が言えるようになるからで、観光業が言論の自由に深く関わっている。

そんな中で名護市辺野古の新基地建設の賛否を問うた県民投票から４年が経ち、７割超が「反対」を選択したものの日本政府は完全無視で、埋め立てを強行し続けている。反対しても無駄ではないかという諦め感がコロナ禍の中で漂い始めていたが、ミサイルの敵基地攻撃で標的になるのではと言う心配も相まって反対運動が広がりつつあり、僕も沖縄県庁前の久しぶりという集会に妻と犬と一緒に参加してきた。

自衛隊基地建設を容認してしまった石垣島では、迎撃ミサイル配備の敵基地攻撃能力に「容認できない」意見書を採択したそうだ。昨年石垣に行った沖縄報告で早く気付いてほしいものだと書いたのだが、嬉しいニュースだ。

ただミサイル配備のための自衛隊基地建設なので、政府は無視して配備してくるだろう。

とにかくロシアのウクライナ侵略戦争で改めてわかったことだが、戦争というのはああ言えばこう言う正当化のプロパガンダで住民の声を封じるものだということ。沖縄のこれら住民投票や市議会採択がことごとく無視されるのであれば、日本の政権はロシアのプーチン政権となんら変わらない民主主義の破壊の上に、理不尽なことをしていることになる。

↑ 石垣の自衛隊基地建設現場（昨年３月撮影）

さて、「僕は泡盛しか飲まない。」と言うぐらい山形でも泡盛のない飲み屋には自ら行かないようにしている。また、北海道旅行でも山梨旅行でも泡盛を飲むために地元の沖縄料理店を見つけ真っ先に行ってしまう。でも２０年前までは芋焼酎が好きで、まだ流行出す前から芋焼酎友の会のように、ない店にしきりに「ないの、特別に置いてくれない。」と言って置いてもらうようにしていた。そのお陰か（ではない）７，８年も経つと芋焼酎を置いていない店がないくらいになった。

ところが沖縄に来ると芋焼酎は皆無、仕方なく全国チェーンの飲み屋に行って芋焼酎を飲んでいたのである。なぜ皆無だったのか、これは歴史に深く関係している。芋焼酎は薩摩藩の地酒だ。琉球王朝が倒され薩摩藩によって支配された時代がある。なんくるないさの沖縄だが、芋焼酎は受けつけなかったのだろう。嗜好性・地域性の強いお酒は押しつけられても根付かなかったのかもしれない。地酒の所以である。

ではなぜ僕は芋焼酎から泡盛に変えられたかというと、不思議なことに蒸留酒なのに古酒へと変わっていくマイルドな味にやられてしまった。それだけでも味わいがあるのに、コーヒーやジュースに混ぜても邪魔をしない控えめなところも気に入った。沖縄好きの理由に、泡盛も加わってしまったという余談である。